FRAUMÜNSTER – PREDIGTEN

フラウミュンスター説教

牧師：ニクラウス・ペーター

2012年7月8日

なんたるロバよ…

すると、主が、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムにむかって言った、「わたしがあなたに何をしたというのですか。あなたは三度もわたしを打ったのです」。バラムは、ろばに言った、「お前がわたしを侮ったからだ。わたしの手につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」。ろばはまたバラムに言った、「わたしはあなたが、きょうまで長いあいだ乗られたろばではありませんか。わたしはいつでも、あなたにこのようにしたでしょうか」。バラムは言った、「いや、しなかった」。このとき主がバラムの目を開かれたので、彼は主の使が手に抜き身のつるぎをもって、道に立ちふさがっているのを見て、頭を垂れてひれ伏した。主の使は彼に言った、「なぜあなたは三度もろばを打ったのか。あなたが誤って道を行くので、わたしはあなたを妨げようとして出てきたのだ。ろばはわたしを見て三度も身を巡らしてわたしを避けた。もし、ろばが身を巡らしてわたしを避けなかったなら、わたしはきっと今あなたを殺して、ろばを生かしておいたであろう」。バラムは主の使に言った、「わたしは罪を犯しました。あなたがわたしをとどめようとして、道に立ちふさがっておられるのを、わたしは知りませんでした。それで今、もし、お気に召さないのであれば、わたしは帰りましょう」。 ***民数記22章28－34節*** *［口語訳］*

そこでバラクはバラムにむかって怒りを発し、手を打ち鳴らした。そしてバラクはバラムに言った、「敵をのろうために招いたのに、あなたはかえって三度までも彼らを祝福した。それで今あなたは急いで自分のところへ帰ってください。わたしはあなたを大いに優遇しようと思った。しかし、主はその優遇をあなたに得させないようにされました」。バラムはバラクに言った、「わたしはあなたがつかわされた使者たちに言ったではありませんか、『たといバラクがその家に満ちるほどの金銀をわたしに与えようとも、主の言葉を越えて心のままに善も悪も行うことはできません。わたしは主の言われることを述べるだけです』。わたしは今わたしの民のところへ帰って行きます。それでわたしはこの民が後の日にあなたの民にどんなことをするかをお知らせしましょう」。 ***民数記24章10－14節*** *［口語訳］*

愛する教会共同体（ゲマインデ）のみなさん、

「敵をのろうために招いたのに、あなたはかえって三度までも彼らを祝福した。」—ひどくがっかりした王バラクは、溢れる怒りにまかせて、この言葉を先見者バラムに頭ごなしに投げつけました。というのも、わざわざ専門家（スペシャリスト）を呼びにやり、その仕事の報酬として、前もって大変な金額を約束していた

のに、それが果たされなかったからです。王は、「称美（Famierung）」(Fame＝名声を与えること！）ないし「誹謗（Diffamierung）」（Fameを奪うこと）の専門家を呼び寄せていたはずでした。良い言葉で高みに持ちあげること、すなわち祝福することに長けている者。また一方で、ここで求められているようにこき下ろすこと、すなわち他の人々を呪うことに長けている者を。バラクは、言葉が祝福をも破壊をももたらす力を持っているという、私たちも承知していることを、よく分かった人物だったのです。彼は、エジプトからの亡命者として新しく姿を現したイスラエル民族を前に、不安を掻き立てられて言いました、「彼らは我々をめぐるすべてを喰らい尽くそうとしている」。そこで、民数記の続く章では、王バラクが投入する秘密兵器について語られます。かの先見者バラムです。…なんという物語でしょう！

―この物語で最良の存在は、この祝福と呪いの専門家・目を開かれた先見者バラムに対して反抗的な、ある一頭のロバです。このロバが良いのは、そのどんくささと、反骨精神があるから。ここに、動物と人間の交流の物語とか、人の「*animal rationale 理性的ナ動物*」を知覚しようとする求め、あるいは、動物の感受性などというものを読み込んでみるなら…これは、なんという物語でしょう！

Ｉ．

さて、そもそもの発端はこうでした：自由を求め、約束された土地に憧れ、荒野を彷徨うエジプトからの亡命者たち。彼らが今や、エリコ近郊・ヨルダンの向こう岸であるモアブのステップ地帯にまできて宿営していたのです。モアブ人の王バラクは、不安に青ざめました。いわく、「彼らはまるで牛のように我々の牧場の草を食（は）んでいる」のです―誰かを誹謗中傷しようとするときに、動物が喩えとして引き合いにだされることは、今日でも未だによくなされます。まさに同じことをするために、彼は、言葉の卓越者（エキスパート）、バラムを呼び寄せたのです。

なかば選挙戦に動員されるコミュニケーションの専門家たちのようだ、と思い起こされるでしょうか。巧みな言葉や悪い風評―すなわち、呪いの現代版―をもって、相手に大打撃を与えるのが、彼らの仕事です。じつに、合衆国の大統領選挙の前哨戦と本選挙にならば、私たちにとっての視覚教材が多くありそうです。そこでは、相手を締め出すために、不当な手段も含めて、あらゆる手段が動員されるのです。

はたして、異邦人の預言者、その道のプロであるバラムは、依頼を受けました。大きな報酬が待っているのですから、身をのり出す思いだったでしょう。が、しかし、まずはその良心に、そして神の声に聞く必要があります。結果、彼は聞いたのです、はっきりと、「行くな、この人たちを呪ってはいけない。彼らは、神の祝福のもとにあるのだ」と。バラムは、これをバラクに伝えるために使いを帰らせましたが、王は頑として承知せず、改めてさらに位の高い使者を遣わし、しかもさらなる報酬を与えることを申し出ました。今や応じたバラムは、いま一度神の声に耳を傾けるために出掛けます―どきっとしませんか―、すなわち、今彼に起こっていることは、私たちにもしばしば思い当たるようなことです。つまり、はじめは、良心が否といいます。しかし、事柄がより重大になり、いよいよ魅力的にな

ってくる！となると、次に良心の吟味の段になったとき、違う答えが聞こえてくる。なるほど人は、じっくり十分に時間をかけてただ耳を傾けなければならないもの。そして、納得する根拠が見つかって、説得的だと思えるに至ったあかつきには、ついに考え方を改め、前に進むことだってあるでしょう。
まさに、そのようにバラムはしたのです。今や彼は、ロバに跨(またが)り出掛けます―良心にさえ、うながされて―、バラクのいる方へ。

ところが、ロバときたら、ある道の狭まった場所、岩壁の細道に至ると動かなくなって、かたくなに立ち留まったまま、ぴくりともしません。実にそれは、預言者だと自認していたバラムには見えなかったものを、このロバが見ていたからです。つまり、ひとりの天使、抜身のつるぎを手にした神の御使いを！御使いは、バラムとロバがここを通りぬけることを許そうとはしませんでした。不機嫌になったバラムは手綱を引いてこれを駆り立て[antreiben]、どうにかしてロバに、天使とつるぎの脇を通過させようとします。対するロバは、バラムの片足を、おそらくは痛みを伴うほどに、岩壁に押し付けました。たまらずバラムは、岩壁に寄るロバを、我を忘れて打ち続けるのでした。そのときです、聖書本文の通りに申し上げますが、神がこのロバに口を開かせられたのです：*「わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは」*。対するバラムが、*「お前がわたしを侮ったからだ。わたしの手につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」*と答えると、なお、ロバはバラムに言います：*「わたしはあなたが、きょうまで長いあいだ乗られたろばではありませんか。わたしはいつでも、あなたにこのようにした[ドイツ語では、treiben駆り立てた]でしょうか」*。ここに至ってようやく、バラムの目が開けます。つまり、ここに至ってようやく、御使いを見るのです。今や彼の二重の不当さに、両の目が開かれます。すなわち、彼は、動物に対する仕打ちにおいて不当であり、また、その「呪いのミッション」に関して、誤ちを犯していたのです。
そこで、彼は悔い、自分のロバのことでわびると、御使いの前にひれ伏しました。そこで、彼が受けたのは、しかしながら、引き返せという指示ではありません。そうではなく、バラクのところに行けというのです。ただ、今度は、命じられたことのみを語るように、それだけが許されました。

さて、印象深いことは、王バラクがいかに盛大な宗教的呪術行為を行っているか、ということです。王は、高台に七つもの新しい祭壇と、犠牲の雄牛らを準備します。しかし、とりもなおさず印象深いことは、バラムが、神の民にとって決定的な局面で、それぞれの亡命者たちを呪うのでなく、むしろ、祝福していることです。バラクが再び同じ宗教劇の舞台と犠牲とを準備して、もう一度また別の高台に彼を連れて行きますが、そこでもバラムは、この民へのさらなる祝福を語りました。三度目も、やはり同じでした。

Ⅱ.
わたしたちが、ここで、三度呪われる代わりに三度祝福されたという素晴らしいモチーフに目を留めるばかりでなく、まるで、効果的に作用する言葉を使うことを本職とした専門家(スペシャリスト)であるスピン・ドクター――イングランドで情報伝達のプロがそう呼ばれます―のように、的確に世論に働きかけてそれを

スピン[空転・回転・混乱]させ、“正しく”(もちろん報酬を支払う政党の立場に立った正しさで)方向づけることのできる、そんな大物が、自分の所有するかくも小さな一頭のロバによってその目を開かれたということにも注意するとすれば・・・愛する教会共同体のみなさん、これは、なんという物語でしょうか！

これは、さらに一歩踏み込めば、わたしたち自身のこととして悟るべきものをおそらく含んだ物語なのではないでしょうか。まず誘惑に、それから良心の逡巡によって試みを受け、しかも姿をあらわす数々の抵抗に当惑させられる。はたして自己の立場に固執する願望を抱き、ついには、人を打つような議論を、権力を、もはや打ち棄てるわけにもいかなる。
そう、小さなロバが語りかけたとき―長く関係を保ち、ずっと変わらず彼に仕えてきたものとして語りかけたとき―、バラムにおいては、まず全てが狂い始めます。*「わたしはいつでも，あなたにこのようにしたでしょうか」？「いや…」*と彼は、[自分の非を]認めざるをえません。ようやくここに至り、バラムの知覚が研ぎ澄まされます。ようやく今になって開かれたその目は、天使とつるぎを、すなわち自らの危険を見留めるに至るのです。

みなさんにとってはどうか分かりませんが、わたしには、やはり、何か目が開かれる思いがいたします。すなわち、わたしは、この物語に、人間―動物の関係を顧みさせるひとつの深い象徴的意味を見出さずにはおれません。わたしたち人間には全くとらえがたく、聞くことも、嗅ぎつけることも、感知することもできない何ものかに、動物たちは敏感に反応していた、そんないくつかの出来事を思い起こさずにはおれません。たとえば、地震などの兆しに気付き、その前に逃げ出す動物たちのことはどうでしょう。わたしたちが鈍感で、技術の上に胡坐をかいて、全ては制御できている、などと考えている間に、もう危難を察知している動物たちのことはどうでしょう。

さらに印象的なことは、ロバが情報伝達をはじめたそのところで、どのように言葉が発せられていたかということですが、そのことは、バラムに、互いの繋がりを、相互性の要素を、思い起こさせようとするものでした。バラムがこの気持ちの結び付きを再び感じとったところで、ようやく、両の目が開かれることになるのです。
いわば、ようやく今になって、彼の良心は再び目覚めたのです。みなさんには、少し[考えが]行き過ぎているとみえているかもわかりませんが、わたしには、この象徴的な物語に、いくつかの具体的な光景[bilder]が、ひとつひとつ思い浮かびます。石油にまみれた水鳥たちの一羽一羽、有害なものに汚染された地域で病を患う動物たちの一頭一頭が、あたかも、わたしたちを見つめ、わたしたちに呼びかけ、問いかけてくるかのようです。いったい、わたしたちには、御使いが、抜き身のつるぎを手にしているのが見えていないのではありませんか？だとすれば、それは、わたしたちが、祝福するためではなく、呪うための道を辿っているからなのではないでしょうか？バラムは、自分のロバをただ移動の手段とか、道具と見るのではなく、相手から自分に、語りかけてくる存在であることを学びました。いってみれば、被造物から被造物へ、という関係を知ったのです。その関係に根差し

てこそ、この物語の中の、真理と人を具体的に動かすものが見えてくるように思います。

Ⅲ.

愛する教会共同体のみなさん、確かに、動物は話をしません。動物は、おとぎ話か、どうぶつ物語か、あるいは聖書のある物語の中でしか、話をしません。しかし、単純にこれを聞き飛ばして、「動物が話をするものか」などと言うのではなく、彼らがわたしたちに語りかけようとしている何事かに身を乗り出して関わってみる価値はあります。素敵なことではないでしょうか。呑気だけれども同時に強情でもある一頭の小さな雌ロバが、プロの高尚な言葉の専門家にして神学者でもある一人の男の目を開いたというのです。もともと偏狭な視野しか持ち合わせなかったこのひとりの人には、[民を呪うという]仕事がありました。だが突然、良心の語りかける声を聞いた彼は、呪いにかえて本当に祝福をすることになったのです。

そろそろ最後となりますが、さらに考えを推し進めましょう。わたしたちが他の人間について感情を込めて話をするときに、相手を動物と比較するということが―それが良い思いからであれ、悪い思いからであれ―ありますが、それがいかに滑稽で、問題含みであるかについてもまた、考察を始めたいのです。わたしたちは、誰かの強さに感嘆するときには、熊の力強さ[bärenstark]だと考えます。すばしっこさなら狩猟犬、甘え上手なら猫のようで、意思の強さはまるでライオン・・・。あるいは、不安がわたしたちを駆り立てる[treiben]とき、わたしたちは人を、狐のように抜け目なく、蛇のように狡猾で、あるいは、鰐のように残忍だ、と見るでしょう。おそらく、わたしたちは、動物の中に、一義性のみを見ているのです。自分たち人間にはそんな一義性はないものだと考えながら、[動物には]今あげたような投影や比喩を用いのです。いったい、わたしたちはそうすることによって、動物たちを改めて道具として利用しているのではないでしょうか？今挙げた例でいえば、精神性を表現するためだけに動物を用い、その存在そのものを本当には認めていないのではないでしょうか？

このバラムの祝福の物語にあって、わたしの心をとらえたものは、つまり、こういうことでした。実に、しばしばロバについていわれるこの強情さ、わたしたちが自分以外のものたちに見出して頭ごなしに否定的にとらえているまさにその性格が、ここでは、ひとつの深みを、ある真理契機をもっているということです。あの雌ロバは、バラムが気付いていない何か決定的なことに気付きます。おそらく、このロバは、自分の主人が誤った道を行こうとしていることを、端から感じ取っていたのです…。
さて、そうだとすれば、わたしたちは、このバラムとロバの物語を、祝福と呪いについての物語としてではなく、ひとつの、人間と動物の関係とその気付きについての物語として学ぶべきであるということになるでしょう。いや、むしろそうとらえるときにこそ、ついには呪いと祝福の道についても、いくらか学びとることができるのです。
アーメン。

PS: ドイツ語による説教原稿は、以下でダウンロードできます http://www.fraumuenster.ch/html/gottesdienst.htm

翻訳に関してのお問い合わせは、大石（ ohishi_shuhey@hotmail.com）まで。